令和５年度　　自己評価結果公表シート

令和６年５月29日　　光の園幼稚園

１、本園の教育目標

- 生きる力の基礎を養うため、健やかな身体と豊かな心情を育てる
- 「勇気と感動とやさしさと」をスローガンに、お話の世界に遊び、楽しく表現し、輝くような心と感性に満ちた創造力を育む
- 自分の心で感じ、自分の頭で考え、自分の体を使って様々に表出（表現・行動）する
- 周りのもの・こと・ひととの関わりの中で、自分の気持ちの折り合いのつけ方を知り、「充実感」を日々積み重ねる（令和５年度）

◎ 取り組みに際して念頭においていること

- 五感を使って自然に親しむ
- 自分の足で立つ（心と体に軸を持つ）
- お話の世界を楽しむ
- 自分の思いやイメージを自由に表現する素地を作る
- 人とのかかわりを大切にして人への信頼感をもつ
- 子どもたちの思いやつぶやきを受け取り保育に活かす

２、令和５年度重点的に取り組む目標や計画

①何気なく使っている言葉（育ちのキーワードなど）の本当に意味するところを保育者間で共通理解を図る

②子どもの今の姿や育ちを次の保育の手立てや育ちに繋げる仕組みを考える

③参観や行事に限らず双方向的に保護者と保育者が関われる機会を増やす

３、評価項目および取組状況

評価項目	取り組み状況
①何気なく使っている言葉（育ちのキーワードなど）の本当に意味するところを保育者間で共通理解を図る	定義が曖昧になり、理解を深めないまま育ちのキーワードを使うよりも実際の子どもの姿をそのまま捉えた方がよいと考え、そのまま記述するようにした。また、教員間の話し合いや保育計画を考える時にも自分たちの言葉を使って子どもの姿や育てたいことを考える時間を定期的に作った。その中で自分たちの言葉で表す難しさに直面するとともに共通理解を深めるために対話を重ねることの重要性も感じた。
②子どもの今の姿や育ちを次の保育の手立てや育ちに繋げる仕組みを考える	毎日の保育の振り返りの様式や年間カリキュラムの作り方を見直し、子どもの姿から次の保育の手立てを考える仕組みを考えた。保育の組み立て方や考え方を学ぶ機会となっているが、完全に機能しているとは言い難い状況である。特に活動の意味を吟味しどう深めていくか、次の手立てをや深まりからどう考えていくか、という点において改善あるいは別の方法を考

	える必要性を感じている。
③参観や行事に限らず双方向的に保護者と保育者が関われる機会を増やす	コロナ禍が開け、クラス懇談を再開し、「お助けマン」と称して保護者の方にお手伝いいただく機会を設けるなどした。普段の送迎時なども含め、個々での話はできても園の保育を理解していただくにはもう少し方法を考える必要がある。

４、令和５年度の目標や計画の総合的な評価

子どもたちは入園進級当初、環境の変化にかなりの戸惑いを見せ、なかなか落ち着けないでいた。保育者は一人ひとりの子どもや各学年やクラス単位で「今の課題」について話し合いを重ね、育ちの保障のための手立てを考えてきた。その中で遊びや活動を支える生活面の不安定さや子どもの心と体の軸を作る大切さを実感した。このような子どもの姿の変化から当初取り組む予定にしていた課題とは異なる「一人ひとりの子どもの見取り」「個人、クラス、学年での育ちの保障のための手立て」といった課題に取り組まざるを得なかった。そういった状況から令和 7 年度からは異年齢で過ごす時間を持ち、生活面を整えることで遊びの基盤を作ることに取り組んでいく。

保護者が来園する機会を増やして園を開き、園の理解に繋げる仕組みづくりは一歩踏み出したところである。保護者の参加、参画の他にもこちらからの発信内容も見直す余地があると考えている。

５、今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
①いかにして個と集団の育ちの保障をしていくか	個の育ちの保障をすることで集団としての育ちの保障もできると考えるが、個の関わりに重きを置きすぎると集団へのサポートが手薄になってしまう現実がある。それらのバランスをどのように図り、「集団の中の自分の在り方」をそれぞれの子どもたちがどう体得していくか、両方の視点から振り返ることを忘れないよう話し合いで適宜考えていきたい。
②子どもの姿ベースで保育を組み立てる（保育者の振り返りの視点と手立てとしての活動内容をどう深めていくか）	昨年度取り組むべき課題として挙げていたが、なかなか深めることができずにいた部分である。週日案の書き方を変えることで意識しつつあるが、まだ、振り返りの視点が活動や遊びの内容ではなく、段取り的なことに終始している感も否めない。活動や遊びをどう繋げていくか、深めて（発展させて）いくかも同時に考えていける様式を作っていきたい。
③開かれた園づくり（方法の模索と発信内容）	まずは、保護者がお客さんではなく、参画している意識が持てる方法を模索していきたい。そして様々な立場の教員が発信しているが、保育の理解につながる内容が何かという視点を持って試していきたい。

６、学校関係者の評価

特に指摘すべき点はなく、妥当であると認められる。